

七夕、あれこれ

下野市教育委員会 生涯学習文化課

七月七日（今年の旧七夕は八月九日）、笹に願

い事を書いた短冊を下げる年中行事ですが、その起源にはいくつかの説があります。元々は中国の習俗で、様々な風習と共に飛鳥時代頃、日本に伝わり、それ以前の日本の習俗とミックスして出来上がった行事と考えられています。大きく分けると起源とされる説は三つとなります。一つは中国で「乞巧奠」と呼ばれる読み書きが上手になる、芸能が上達することを願った風習。二つ目も中国の風習で、農作業の時期を知るための星の観測から生まれた「星伝説」。三つめは古くから日本で神様に布を捧げる女性を信仰した「機織」の風習と言われています。甲塚古墳出土機織り形埴輪も女性です。

星伝説については、『万葉集』に百三十首を超える七夕に関係のある歌が残されており、その多くが男女の恋愛に関する内容のようです。歌人の中でも著名な柿本人麻呂は、次のような歌を残しています。天の川楫の音聞こゆ、孫星と織女と今夜逢ふらしも（巻一〇）。意味は「天の川に彦星が舟をこぐ音が聞こえます。今夜、彦星と織女は会うのですね」となります。一読すると彦星と織女のロマンスと読み取れます。しかし、ご存知の

方も多いかも知れませんが、実はこの二人がこう

なったのは深い事情があります。それは、天の川の東岸に住む織女（棚機女）は天帝の娘で、父である天帝の衣を織るためずっと機織りに打ち込み、他のことは見向きもせず、その様子を憐れんだ天帝が西岸に住む働き者の牽牛に嫁がせることとしました。二人は恋仲になるとそれまでとは一変して全く仕事をしなくなります。天帝は激怒して織女を連れ戻します。連れ戻された織女が余りにも嘆き悲しむので毎年一度、七夕の夜だけ会うことを許しました。これは、今から約二〇〇〇年前に書かれた『荊楚歳時記』に記されているストーリーです。また、ここには宮中の妃達が月に向かって、九つの穴の開いた針に五色の糸を通す願い事をおこなったと記されています。

この物語では、織女は天帝の娘となっています。日本でも布を織る行為は神聖な作業として伊勢神宮などで今でも受け継がれています。ただし、『古事記』の記載では「天の服織女」、「日本書紀」では「弟織女」と読ませており、この「弟織女」が最初に出てくるタナバタの読みとこのことです。残念ながら「棚機女」の文字は出てきません。七夕と棚機津女の関係を想定したのは折口信夫※

ではないかとされています。

『続日本紀』には、天平六年（七三四）七月七日に聖武天皇が相撲の観戦をした記録が残っています。遡って垂仁天皇の時にも七月七日に相撲の記事があり、七夕と相撲の関係も面白い事例です。

悲しい七夕の伝説として、お隣の小山市の祇園城（城主小山政種）は、戦国時代の終わり頃、北条方でしたが、秀吉の小田原城攻略の際、濃霧に包まれた祇園城の見張りの兵は、周辺の畑で栽培されていた「もろこし」の穂先を敵兵の槍の穂先と見間違え「もはやこれまで」と落城し、北条から嫁いできた姫は井戸に身を投げ自害したという伝説が残っています。そのため、旧小山領内の人々は「もろこし」も栽培せず、落城の日が七夕の日のため、七夕の飾りつけも行わないと言われています。でも小田原攻めの時に祇園城が攻撃された事実は無いとも言われています。

※折口信夫（おりぐちしのぶ）明治時代の民俗学者

